**高烏砲台跡**

高烏砲台は、呉の島々や山間部に築かれた13基の砲台のうちの一つである。「広島湾要塞」「呉要塞」とも呼ばれ、広島港と呉海軍港を敵船の接近から守るためのものであった。本土の高台にある高烏砲台は、1901年に完成した。本土と倉橋島を隔てる音戸の瀬戸海峡を見渡すことができる。高烏砲台には28センチの榴弾砲が6連装されていたが、実際に戦闘に使われたことはなかった。

呉は1886年に海軍の主要な駐屯地に指定され、帝国陸軍は翌年にこれらの砲台の建設を計画した。この計画は1893年に策定されたが、日清戦争（1894～1895）の影響で実施が遅れ、実際に建設が始まったのは1896年のことであった。1920年代後半からは海戦よりも空戦が主流となり、高烏砲台は一度も使用されることなく、1926年に軍部は高烏砲台を放棄した。戦前の昭和（1926～1945）になると、帝国海軍はこの砲台を掌握し、近くの野原に高射砲を設置した。しかし、この新設は第二次世界大戦（1939～1945）で全壊し、現在見られる遺跡だけが残っている。

第二次世界大戦後、占領下の連合国軍は残存する軍備を解体・破壊し、1961年に音戸の瀬戸公園として整備されるまで一帯は廃墟と化していた。1967年には、高烏砲台にあった「高烏砲台火薬庫」が入船山記念館に移された。同年、音戸の瀬戸公園には、音戸の瀬戸用水路を掘削したという伝説を記念して、平清盛（1118～1181）の銅像が建立された。この伝説によると、清盛は扇子を使って太陽が沈むのを遅らせ、一日で水路を完成させたと言われている。園内の展望台からは、瀬戸内海に浮かぶ小さな島々と、その間を行き交う船が一望できる。